

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

いじめと全員面接

1 全国で続くいたましい事件

いじめは、人の集まる所であれば常に起こりうる現象です。それは、日常的に人間関係がある中で、力のアンバランスを背景として繰り返し行われるという特徴を持ちます。働く職場では、パワハラ、セクハラはいうに及ばず、最近ではマタハラやパタハラが社会問題化しているところでは。

7月5日、岩手県で中学2年の男子生徒（13歳）が、自宅近くの駅から電車で飛び込みました。また、近隣の山形県でも、2014年1月の始業式の日、中学1年の女子生徒（12歳）が、山形新幹線にはねられ死亡しました。どちらも、いじめを苦にした自殺でした。

2011年10月滋賀県大津市で発生した中学2年の男子生徒（13歳）のいじめ自殺事件。この事件はご承知のように大きな社会問題になり、これを受けて「いじめ防止対策推進法」が2013年9月から施行されたことは、みなさんご記憶にあるでしょう。

ところが、この法律の施行以後も、いじめによる自殺が後を絶ちません。2014年1月、長崎県で中学3年の男子生徒（15歳）が悪口等の精神的暴力を苦に自殺。その1カ月後の2月には、広島県立高校1年の男子生徒（16歳）が、所属する野球部でのいじめに耐えきれずに、自ら命を絶ちました。これらのケースでは、いずれも学校側は、いじめに気付いていませんでした。

前出の岩手県のケースでは、担任教諭との生活記録ノートに、ずっと暴力が続いていることや、もう限界、死にたい、といった記述も見られました。また、広島県立高校のケースでは、いじめのアンケートを、年2回実施されてもいたのです。

しかし、いじめを早期に発見し早期に解消する、という望ましい解決にはつながらないまま、尊い若い命が失われてしまいました。誠にいたましく、学校現場で支援に携わる者の一人として、最も避けたい破綻が、このいじめ自殺です。

2 誰もを不幸にするいじめによる破綻

自殺する際には、「視野狭窄」と呼ばれる状態に、追い込まれているといえます。これは、その問題を解決するには、自殺するしかないと思ひこ現象です。

生あるものとして、誰もが本来は生き続けることを望むものです。しかし辛く耐え難い状況が続く中で、辛抱

も限界に至ると、早く楽になりたいという思いも強くなり、死を選択するのです。そこには必ず孤立と絶望感が存在します。SOSを発している中で、「誰もわかってくれない、誰も助けてくれない」という思いで、彼らの傷ついた心はいっぱいになっているのです。

親よりも子どもが先に逝ってしまう、これ以上の親の悲しみはないといわれます。親ばかりでなく、彼らの友人や仲間も大きなショックと喪失体験を味わいます。また、彼らに関わった教員はじめ学校スタッフも、大きなダメージを受けます。社会からの信頼も、著しく損なわれてしまうことも避けがたいでしょう。

いじめていた者たちも、心境はいかなるものでしょうか？ いじめ防止対策推進法が施行された2カ月後、福岡県で高校3年の男子生徒（18歳）が、自宅近くのマンションから飛び降りました。彼はその足元にタブレット型のパソコンを残します。その中には、「絶対許さない」との言葉と共に、彼をいじめ続けた男子生徒数名の名が、明記されていました。

これら加害者である男子生徒たちは、その後学校から停学処分を受けます。それ以上に、彼ら自身、「若い仲間の命を死に追いやった」という重い十字架を背負って、長い人生を生きてゆかなければならないでしょう。

いじめによる破綻は、被害者ばかりでなく周囲の多くの人たちが傷つき、不幸にしていくものといえるのです。

3 いじめの構造と破綻防止のために

学校のいじめは、7割近くがクラスで発生します。

その周辺には、必ず観客と傍観者がいます。いじめを面白がってはやし立てる観客は論外ですが、見て見ぬふりをする傍観者が最も多く、彼らはいじめに暗黙の支持を与える容認者とみなされます。調査データによれば、傍観者の多さといじめ被害の発生数とは、高い相関関係を示しているからです。

いじめは早期発見、早期解消が重要です。いじめが発生した時、本人はじめ周囲がどう声をあげるか、が問われます。さらに、いじめを生まないクラスや組織をどう作っていくか、いじめを起ささない人にどうしたら成長できるか、これら未然防止につながる視点こそ、最も大切だといえるでしょう。

東京都では、いじめによる破綻防止のために、昨年度から都内の全公立小、中、高校で、スクールカウンセラーによる全員面接を、スタートさせたのです。（つづく）